

『伊勢物語』成立私考 第五稿

——『大和物語』とのかかわり——

井上英明*

紀貫之は伊勢の御の没後、いくばくもない天曆八年（九五四）頃に卒したといわれるが、この兩人が歴任した宇多・醍醐・朱雀・村上四代の宮廷サロンに流布する歌・説話の旧聞軼事は、この天曆年間に成立したといわれる『大和物語』においてうかがい知ることができるところで、幕末の国学者、前田夏蔭の撰述にかかる『大和物語纂註』の書き出しは、師の清水浜臣の説の祖述から始まる。

——浜臣云。此物語の大むねは、打聞にして、作物語にはあらず。歌をもとにて文はすゑなり。撰集家集などの端書に近し。されは、作者の歌とおほしきはなし。みな古今の人々の歌を、打聞にしるしたるはかりなり。伊勢物語に、文勢の似かよいたる所もあれと、よく考へれば、伊勢には事遠くして、中中に宇治大納言物語のかきふりにちかし。されは、作り物語にはあらずして、打聞物語なり。其打聞の歌をかきとめむとて、文はつたなし。これまことに拙きには

あらず。伊勢などのやうに、わさどつくり構へしものならねはなり云々。^{注(1)}

要旨は『大和物語』が『伊勢物語』のような仮作物語（虚構）ではなく「打聞き物語」、すなわち直接に聞いた「実話」だということである。したがって、加茂真淵^{（元禄十一明和六一）}がすでに『大和物語直解』^{（宝暦十一）}において、『伊勢物語』を「文の様、いにしへにならひてこと少なくて心こもり、みやびかにして物あつし」とし、『大和物語』の方は「文はつたなし。これまことに拙きにはあらず。伊勢などのやうに、わさどつくり構へしものならねはなり」と断じている。「打聞」であるからには『大和物語』は創作ではなく、聞き書きだから、素材が口碑・伝説の類であれ、「事実」の記録ということになる。物語や小説のように語り手と作者の間の緊張や背反といったディスタンスはない。語り手の語るままに聞き手は記録しただけで、その結果が今日私共の目にする『大和物語』という作品^{テキスト}になったと思わざるをえない。『大和物語』は少なくとも一回的な筆録ではないといわれる。そのことはいくつかの章段の末尾の語句が注記めいたものであること^{注(2)}によって判然とする。すでに専家によって一部指摘されていることではあるが、つぎのような語句である。すなわち、「人忘れにけり」（八段）、「よからぬは忘れにけり」（二十九段）、「御返しは聞かず」（三十六段）、「御返事はありけれど、人はえ知らず（四十五段）」、「返し、をかしけれど、え聞かず」（六十五段）、「親王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり（七十八段）」、「こと人のもありけらし」（八十段）、「返しは、え聞かず、（八十四段）」、「となん、返しは知らず（百十三段）」、「歌はいとおほかりけれど、え聞かず」（百二十四段）、「聞かねば書かず」（百三十五段）、「人のいひけるままなり」（百四

十七段)……といった具合に、筆録の体であることは間違いない。

ところで、『大和物語』には、『竹取物語』・『伊勢物語』・『伊勢集』・『平仲物語』から『うつほ物語』・『落窪物語』・『源氏物語』を経て『今昔物語集』等に至るまで、時代を「昔」に設定する、いわゆるモノガタリの冒頭表現を襲ってはいない。「昔」なる語は消えて、登場人物も実名を記して時代設定も一読明確な章段が目立つ。

難波喜造氏の所説に依ると、『大和物語』は、先行文献の他に口伝えの話柄を素材としており、かつ『公忠集』・『兼輔集』・『朝忠集』・『三条右大臣集』等の私家集とこれを対比するに、その直接の親子関係は無いとのことである。^{注3)}「作り物語」と「打聴物語」との、形態・内容を異にするゆえんである。『大和物語』の素材をすべて歌反古、歌がたりに限定してしまふことは大いに問題があるが、すでに拙文の第一稿から主題にして来た『伊勢物語』の成立との関連において見れば、第百六十六段の末尾の一節が当然問題となるであろう。

これらは物語にて世にあることどもなり

右は『伊勢物語』九十九段の「右近の馬場のひをりの日」の条りの男女の贈答歌を中心にやや暴露的に——他に例をいえば『伊勢物語』ではたんに「中将なりける男」とあるのに、『大和物語』は「在中将」と官位が記名化される——語った一段の末尾の文句である。さらに諸注釈のすでに指摘して来たごとく、この百六十六段はそれ以前の百六十一段から百六十五段まで、『伊勢物語』の内容を連続的に収載するものである。すなわち、三段、七十六段、百段、五十一段、五十二段、百二十五段、九十九段、計七段に相当する。そこで既掲百六十六段末尾の一文の傍点

を施した語句に著目すると、複数表現であるからおそらくこの末尾の段のみを指すのではなく、六段すべてにわたるものであろう、というのが高橋正治氏の説である。同氏の所説は次のようである。

——形態の上から各段の書き出しを見ると、「在中将」、二条の后宮……(百六十一段)、「又在中将、内裏にさぶらひけるに……」(百六十二段)、「在中将、后宮より」(百六十三段)、「在中将のもとに」(百六十四段)、「水尾の帝の御時」(百六十五段)、「在中将物見に出て」(百六十六段)となっている。『大和物語』では大体同一人物を主人公とする段章の続く時は、あとの段章は、「おなじ」と受けるが普通である。ここでは百六十五段以外はすべて「在中将」ではじまるのは、「昔男ありけり」など本文をそのまま置きかえたような形跡とも見られる。この六段は『伊勢物語』からとり入れられたと考えてよさそうである。^{注4)}(下略)

しかるに一方、岩波古典大系本『大和物語』の校注者、阿部俊子・今井源衛の両氏は、当該章段の「補注一六二」において、この段が『伊勢物語』に関係をもつことはたしかであるが、「現存の伊勢物語そのものとは必ずしも考えられない」と断って、『古本業平集』からの発展過程の一つの段階のそれであったと考えられるという。この考えは池田龜鑑氏の成立論の踏襲とも推されるが、両氏の「発展過程の一つの段階」とされる根拠となるべきものは、既掲、『伊勢物語』・『大和物語』との内容における共有段中、第三段のみ、『大和物語』が『伊勢物語』の内容を無視していることにあるものと思われる。

すなわち、『伊勢物語』の末尾第百二十五段は、

むかしおとこわづらひて心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとは思はさりしを

であるが、『大和物語』ではその百六十五段、全文は左にかかげる通りである。

I 水尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所とていますかりけるを、帝御ぐしおろしたまうてのちひとりいますかりけるを、在中将しのびて通ひけり。中将、病いおもくしてわづらひけるを、もとの妻どももあり、これはいとしのびてあることなれば、えいきもとぶらひたまはず、しのびしのびになむとぶらひけること日々ありけり。さるに、とはぬ日なむありけるに、病もいとおもりて、その日になりけり。中将のもとより、

(1) つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮してむとや

とておこせたり。「よはくなりにたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返りごともせむとするほどに、「死にけり」と聞きて、いといみじかりけり。死なむとすること、今々となりてよみたりける。

(2) つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

とよみてなむ絶えはてにける。

(2) 歌に(1)歌が付着し、在中将業平が病いを得て死に至るまでの長い描写である。

また、もう一つは、『伊勢物語』第九十九段、「右近の馬場のひをりの日」と『大和物語』第百六十六段であるが、話の内容はほとんど同じではあるものの、かんじんの贈答歌が違っている。今、両歌のやりとりを抜書してみる。

II 『伊勢物語』第九十九段。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日^{けふ}やながめ暮さむ
返し
しるしらぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなり
けれ
のちはたれとしりにけり(塗籠本系のみナシ)

『大和物語』第百六十六段。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しきはあやなく今日^{けふ}やながめ暮さむ
とあれば、女、返し、
見も見ずもたれと知りてか恋ひらるるおぼつかなみの今日のな

がめや

とぞいへりける。これらは物語にて世にあることどもなり。

右のⅠⅡの関係をそのまま読めば、『伊勢物語』と『大和物語』とでは、前者の男女邂逅の場面が、はつかにかそけき余韻をひびかせてロマンチックなに対して、後者の「この女の顔いとよく見てけり。ものなどいひかはしけり」の条りなど、語りと聞き手（読者）の間に美的距離など一切ない。前者にくらべて読者の興味は、もっぱら、あからさまな事実の報告にあることでは、この章段も例外ではない。それでは右掲末尾の一節の傍線の条りは『伊勢物語』を指すのであろうか。このことはすでに『大和物語』の古注が気づいて来たところである。後学に示唆するところの大きいものを挙げると、つぎのような文言である。^{注5)}

このなりひらのものかたりは世がたりにかたりにかたりつたへてたれもしるへき事ともなるへしとにや又いせ物語などにて世につたふることどもなりとも侍るへし（北村季吟『大和物語抄』承応二一八六五三）

(2) こはよの人のなへていひつきてしれる。ふることなりと記者のことはれる也（高橋残夢『大和物語管窺抄』文政年間一八二八—一八二九）

(1) は「世がたり」、つまり世間の噂話で、当時の人に既知の事実、そしてそれはすでに「伊勢物語その他」の作品を通して世間に伝わって

るものだ、ということであろう。

(2) は『古事記』以来、特に『万葉集』の人麿や赤人の長歌にみられる「語り継ぎ言ひ継ぎゆかん」式の「旧辞」における「語り」の伝統であり、それを筆録する「記者」は国文学史を遠く遡って、太安万侶に淵源をもつといってもよい。だが、こうしたおおらかな指摘では満足出来ないのが近代の国文学である。『伊勢物語』と『大和物語』の間の書承関係を追究するのが文献学のメリットであるが、広く伝承ということからすれば、デメリットもまた存在するといつてよい。

まず、この『大和物語』の末尾の「記者」の「ことは」には異本があることが知られている。^{注6)}この引用文は二条家本系統の「為家本」だが、より実証的といわれ、かつ清輔・顕昭等の六条家にゆかりの深い、いわゆる六条家本系統の「鈴鹿本」・「勝命本」・「御巫本」には、

これら物語にて、よにある・より（次・巫・鈴鹿）・ほかのことどもなり（巫）

とあり、顕昭（大治五—承元三）の『古今集注』の記述と奇しくも一致している。『伊勢物語』の「見ずもあらず」の歌の注にみえる顕昭の「普通ならぬ本」のことを指すのだが、おそらく六条家所伝の改注・合理化であろう。だが、この「普通ならぬ本」の所在を突きとめる方策はまったく無い。ただ、右に掲げたⅠの(1)歌は『伊勢物語』に存在せず、流布本『業平集』にも無く、ひとり西本願寺本『業平集』と雅平本『業平集』の中で、「他本」とある中に存するものである。このことに関するかぎり、少なくとも『伊勢物語』との書承関係は否定されなければならぬ。あるいはごく漫然と、当時、別個に行われていたものと思われる原「伊勢物語」と「在中将集」から各々採り、付加されたとみれば、問

題は一応解消されようが、それにしてもこうした態度はいかにも根拠薄弱だといわれても仕方がない。

Ⅱもまた、贈答歌の内、女の返歌が『伊勢物語』と『大和物語』では異なっている。現行の『伊勢物語』・『大和物語』との間の書承関係を否定するものである。しかるに、この末尾の記述は、当時そのような内容をもつ『伊勢物語』が現実に流布していたことを証し、それは六段中、各段のすべてを含むものを指したに違いない。ところが、ここで顕昭『古今集註』の中で、『古今和歌集』巻十一恋一の「見ずもあらず」の歌の注をふたたび熟視してみる。全文はつぎのようである。

——但普通伊勢物語には古今のまゝの贈答也。普通ならぬ本には此の返歌を女の返しとて、見も見ずも誰としてか（下略）

とある。要するに、「普通伊勢物語」と「普通ならぬ伊勢物語」が顕昭寓目下に存在したわけである。したがって、当時、現行『伊勢物語』とは若干内容の違った「伊勢物語」が流布していたものとみるほかない。ただし、前稿で『平仲物語』と『大和物語』との間における内容上の矛盾を指摘したとき、両者には少なくとも書承上の親子関係は無いという説に私は賛意を示しておいた。その理由としては、内容自体が大きく矛盾することが第一の理由であったが、就中、その末尾に、「その返しそれよりまつ／＼もうたはおほかれとえ聞かず」とあるによるが、その主たる根拠であった。つまり、『大和物語』の方はほぼ完全に口頭による伝承を打ち聞きした作品だということを考へてのことである。

しかるに、目下、検討中の『伊勢物語』の本文と『大和物語』のそれとの内容上の矛盾のみをもって、これもまた文献上の親子関係を否定し、

かつ、この作品のすべての内容を「歌がたり」の系譜によってことごとく一律化しようとする偏向は大いに改められてしかるべきであろう。やはり、ここは「普通ならぬ伊勢物語」の実録化として、ある程度の書承関係を認めるべきであるように思われる。同時にさきに紹介した高橋正治氏の判断も首肯されるべきかと思う。しかし、両作者が、なおこりづまに繰り返すが、フィクションと実録という言葉の時・空、作者↓語り手↓記者↓読者という系列を異にするテキストであることは、ここでも十分に銘記されておかねばならないのである。

『大和物語』はさきの難波浩氏の所説の通り、作歌にまつわる歌語りと歌反古の記述からなるもので、作品の内容は前半が宇多・醍醐両帝を中心とする宮廷サロンの歌にまつわるゴシップに素材をもとめ、後半は六歌仙から『万葉集』の口碑・伝説にまで及んでいる。その成立年時については天曆八年崩御の天皇太后隠子についての記述、「故后の宮」（八十一段）の故の字が勝命本では書き入れとなっているとのことなので、後人の補筆だとすれば、他の諸段はすべて天曆五年（九五）以前の記事内容として齟齬を来さない、よってその成立もその頃とされるのが一般である。^注そうすると、天曆五年よりさかのぼることわずか六年、天曆八年の十月までに死没したとされる貫之が（安田氏蔵和歌十種序による萩谷朴氏説。通説は天曆九年）、『大和物語』に流れ込む『伊勢物語』の形姿と内容を知らなかったはずはあるまい。そしてこの天曆五年は折しも第二の勅撰和歌集に詔が下された年である。

かくして、『古今和歌集』から『後撰和歌集』頃までは、おおよそ貫之の生活体験の枠内にある時期であり、さらに言えば、『土左日記』が成立したのは『大和物語』の素材がテキストとして形を成す直前のこと

ではなかっただろうか。『大和物語』がすでに「物語としての伊勢物語」の流布を前提としているからには、最終的にはわれわれの考える原「伊勢物語」の成立期の一応の目安として、この天曆五年あたりに「昔男」、あるいは架空の「ナリヒラ」像の一代記が歌がたりとして、さらには実在の「在中将」として、『大和物語』に記載されていたのではないだろうか。

拙論の第一稿から五回にわたり、稿を重ねて本稿に至るまでの縷説を要約すると、おのずと導き出される結論は大略つぎの項目に分かたれよう。

(一) 『古今和歌集』に収載するところの業平歌三十首の内、その大半はすでに詞書きというよりも、すでに物語化されたものとして先行すること。

(二) 『平仲物語』の粉本、仮説上の「自撰貞文集」は、現存『平仲物語』からみるに、『伊勢物語』の形態・内容の面を強く支配していると推測されること。

(三) 『伊勢集』冒頭の歌日記は現行本において後人の加筆を認めるものの、大略、伊勢の御の自作にかかるとであろう。諸本の校合と史実の最終的整合性からいうと、娘の中務あたりが『伊勢集』の作者とする説があるが、母子共に三十六歌仙の高名な歌人とはいえず、母の伊勢の御に比して娘の作風はあくまでも温雅、流麗に過ぎて、女としての痛恨の青春、恋愛における情感のきらめく言語化に欠けている。さらに『伊勢集』は、『伊勢物語』・『平仲物語』より、語りの構造において一段と写実化し、近代小説に向けてという条件のもとでは、文学形態的に「進歩」しているが、その文体、修辭、語法等は『伊勢物語』の古撰・朴訥

に近いこと。

(四) 『土佐日記』は紀行性よりみて、『伊勢物語』の東下りにその先蹤を負い、修辭においては語戯・俳諧を受け継ぎ、かつ、在中将・惟喬親王への敬慕の情が激しいこと。

(五) 『大和物語』はすでに原「伊勢物語」の流布を証すること。

(六) 作品としての『平仲物語』・『伊勢集』・『土佐日記』を通読したとき、『伊勢物語』には都鄙に繰り広げられる人間のあらゆる悲・喜劇がすべて「みやび」なる純粹感情に聚斂されていくのに対して、先きの三つの作品は多分に現実的、理知的、実話的、感傷的、私的、自己愛的要素の強い、いわゆる日常写実の傾向に偏し、この対照はとりもなおさず、貞観（八五九―八七六）と寛平（八八九―八九七）・昌泰（八九八―九〇〇）・延喜（九〇一―九二二）の各時代思潮の差が歴然としていること。

(七) これまでの卑見を統一的にまとめてみて、われわれの原「伊勢物語」を透視すると、つぎの諸段が浮かび上って来る。もとより文章が現行のものと同じだとするのではない。括弧は初見である。

二段（『古今集』、◎三段（『大和物語』、四段（『古今集』、六段（『新撰和歌集』、七段（『後撰集』、◎九段（『古今集』、十七段（『古今集』、十九段（『古今集』、◎二十五段（『古今集』、四十一段（『古今集』、四十五段（『後撰集』、四十七段（『後撰集』、四十八段（『古今集』、五十一段（『古今集』、五十二段（『大和物語』、五十九段（『古今集』、六十九段（『古今集』、七十六段（『古今集』、八十段（『古今集』、◎八十二段（『古今集』、八十三段（『古今集』、八十四段（『古今集』、八十七段（『古今集』、八十八段（『古今集』、九十七段（『古今集』、九十九段（『古今集』、百三段（『古今集』、百六段（『古今集』、

集』、百七段（『古今集』）、百二十三段（『古今集』）百二十五段（『古今集』）、計三十一段。

◎印は明らかに後人の加筆と思われる箇所があり、現行のままとは到底考えられぬ章段である。もちろん、これら以外の章段もやはり原「伊勢物語」に算入してもよい諸段が若干存在するであろう。しかし、そのことは結局、原「伊勢物語」が、はたして虚実を交えた昔男、在中将の一代記の構想で創作されていたか、いないかにかわってくる。換言すれば、完本としての現行『伊勢物語』の天福本以下、権威ある諸伝本のすべてに通じるところの「初冠り本」を原型として認めてよいか、否かということである。私は本誌の過去一連の論考で「初冠り本」に対立するかに見える非現存（断片のみ有り）の異本を単独に論じることを斥け、「初冠り本」を原型とする仮説に立ち、話を進めて来た。そうしなければ光源氏の一生の原型たるわが在五中将のそれを物語のヒーローとして想定することは不可能な事であったからである。

一九七〇年代からわが国においても流行し出した、いわゆる「物語学」でいうところの語り手、聴き手、記録者、読者などの一切の分析に優先するのが、すでに旧套に堕したかにみえる主人公の一代記への直観だからである。さらにこうした直観が昔男として実像を結ぶナリヒラの生涯の時・空を織りひろげ、その創作過程がナラトロジーのテクニクを後から要請するかのようである。

注(1) 引用文は『大和物語古註釈大成 日本文学古註釈大成』（日本図書センター。昭54）、句読点は私にふる。

注(2) 阿部俊子校注『大和物語』（岩波、日本古典文学大系、昭32）。南波浩今井源衛校注『大和物語』（朝日、日本古典全書、昭36）。高橋正治校注・訳校注『大和物語』（朝日、日本古典全書、昭36）。高橋正治校注・訳

『大和物語』（小学館、日本古典文学全集、昭50第三版）それぞれの「解説」参看。

注(3) 難波喜造「大和物語の素材」（『日本文学史研究』十三号、昭26・6）。

注(4) 高橋正治『大和物語』（塙書房、昭37・10）、六七―七三頁。

注(5) 雨海博洋編著『大和物語諸注集成』（桜楓社、昭58）六二―六六頁。

注(6) 難波浩『前掲書』「補注」一三五。

注(7) 阿部俊子今井源衛校注『前掲書』「補注」一六二。

付記。『大和物語』・『伊勢物語』本文の引用文は注(2)の高橋正治校注・訳本に依った。

（平成十四年師走二十四日稿）